

留萌から稚内へ日本海沿いに国道二三二号を旅行すると、道路はほとんど勾配もない単調な直線であるが、前半は左手に焼尻と天売の二島が、後半は利尻と礼文の二島が海上に眺望できる絶景を堪能でき、退屈することがない。とりわけ冬場には真白に冠雪した秀峰利尻富士が白波の彼方に屹立している雄姿に感動することができる。

もっぱら目先は海側に固定しがちであるが、最近では、山側にも新規の風景が登場してきた。風力発電の風車である。留萌や小平にも何基かの風車はあるが、最初の庄巻は苦前のウィンドファームである。海岸段丘を利用した牧場の内部に約四〇基の風車の鉄柱が林立し、合計四〇メガワットの発電能力のある施設になっている。真白な鉄柱の上部で真白な三枚羽根が回転している様子は、従来の日本にはない風景である。

さらに北上していくと、羽幌や遠別や手塩などの郊外にも何基かの風車があるが、遠方からも目立つ巨大な施設が最近になって稼働しはじめた。幌延の風力発電施設である。日本有数の湿原であるサロベツ原野の端部に約三〇基の鉄柱が一列に整然と建設され、一枚が数十メートルにもなる羽根が悠然と回転している。周囲は起伏のない原野であり、どこからも確認することが出来るほどの設備である。

これらはカリフォルニアのアルタモントにある、約一四〇平方キロメートルの丘陵地帯に約八〇〇基の風車が林立しているウィンドファームと比較すれば、巨人と子供ほどの差異であるが、日本では目新しい風景である。実際、自然エネルギーを後押しする環境問題の影響もあり、九〇年代初頭には全国で一〇〇キロワット程度であった風力発電能力は、この一〇年間で三〇〇倍以上に増大しており、そのような風景の背景となっている。

このような急激な増加は風力発電が社会から期待されている証拠であるが、問題が皆無というわけではない。第一は発電価格の問題である。現在、風力発電には補助がなされているが、それでも順調にいった初期投資を売電費用で回収できるのは十年以上の年月を必要とする。もちろん今後の原油の価格上昇を想定すれば、より短期の年月での回収も期待できるが、現状では、それほど有利な発電技術ではない。

第二は環境問題である。風力発電は地球規模の環境問題への対策としては評価されるものであるが、地域単位の環境問題では問題がある。岩手の三陸海岸の断崖の上部に計画されていた風力発電は地元の人々の反対で結局中止になった。理由は自然景観の破壊と、一帯がイヌワシの棲息地帯であることである。幌延の施設もオオワシについて同様の問題が懸念され、約一億円の環境アセスメントを実施して、なんとか実現した経緯がある。

実際、幌延から稚内までのサロベツ原野は、夏季には多種多様な草花が百花繚乱となる場所であり、冬季には、風車に相応しい強烈な西風の効果もあり、これ以上に荒涼とした風景は国内には存在しないというほどの自然である。そこに環境問題の解決に貢献するという名目で人工施設が建設されるのは矛盾している。しかも、はるか彼方からも目立つ鉄柱は広大な原生の自然の景観を一気に破壊しかねない。

生物の社会だけでなく、人間の社会も多種多様な要素が複雑に影響しあう構造で構成されている。ほとんどの場合、ある問題の解決のための手段は別種の問題の原因になっている。この国道二三二号を通行すると、道路の右側と左側が、そのような問題の存在を象徴するような景観を提供してくれるのである。